

肉用鶏農場から分離された大腸菌の薬剤感受性とその性状

三八地域県民局地域農林水産部八戸家畜保健衛生所

○松崎 綾美 荻野 心太郎

近年、薬剤耐性菌による感染症が増加し、基質拡張型 β ラクタマーゼ(ESBL)産生菌が重要視されている。そこで、抗生物質等を添加している有薬ブロイラー農場2戸、無薬ブロイラー農場1戸、無薬の地鶏肥育農場3戸を対象として、敷料、生鳥、死鳥の材料から大腸菌296株を分離。セファゾリン、ナリジクス酸など9種類の薬剤で感受性試験を実施。セファゾリン耐性21株はダブルディスクシナジー法、 β ラクタマーゼ産生識別法によりESBLの検索を行うとともにO抗原型別試験(デンカ生研)を実施。また、生物型確認のため乳糖、サリシン、ズルシット、ラフィノース、トレハノースの発酵試験を実施。その結果、2種類以上の薬剤に耐性を示す多剤耐性は、有薬ブロイラー農場で多く、8種類に耐性を示す株も確認。一方、無薬ブロイラー農場では有薬ブロイラー農場に比べ多剤耐性の割合が低い状況。無薬地鶏農場では日齢が進むにつれて多剤耐性の割合が高くなりナリジクス酸に対する耐性株が増加。セファゾリン耐性21株は全てESBL陰性であったが、21株がペニシリナーゼ陽性。O抗原はO1が2株、3群が1株、5群が2株、6群が5株、その他は不明。発酵試験では、乳糖は発酵、サリシンは非発酵であったものの農場、材料により数種のパターンに分類。今回調査した農場についてESBL産生菌認められず、畜産物の安全性を確認。今後とも国で定めた「薬剤耐性対策アクションプラン」により監視を続けていく所存。